

聞きとり調査

極寒、地獄の八年

高知県 小松 憲 三

私は、昭和二十年三月、現役兵でチチハルの独立自動車隊に入隊、五月中ごろ新京、七月末稜陽に転属、八月十五日、終戦の日に奉天の関東軍補給廠に入った。

奉天市街の西も東もわからぬまま、部隊の命により、満州国軍の兵器を引き揚げに行き、翌十六日、奉天の北稜という所へ火薬庫の警備に行った。兵長以下十二人が門を入ると、軍属の方が一人、私たちを見てとび上がった。私たちは全くの孤立状態、武装解除も受けず、武器を持ったまま気楽に、九月中ごろになっても部

隊から何の連絡もない。町の状況は全くわからない。

そのうち、我が方の中尉の案内で、ソ連の将校はか四人が、受渡しだろうか、倉庫を見に来たが、十五分くらいで何も言わずに帰っていった。私たちは、このままいなければならぬのかと話し合い、軍属の方は家族が気にかかるという。それでは町へ出て官舎を訪ねようということになり、現地人の馬車を雇い、武器を下積みにして荷物を積み、おそろおそろ町へ向かった。

軍属は家族を探しに出かけ、私たちは空いた官舎を探し当て、早速武器を井戸へ放り込み、部隊へ使役に行きながら、十日余りが過ぎる。使役に行っている間、ソ連の方では捕虜のつもりらしい。このままではいけない、何とかして内地へ帰らなければと、軍服を脱ぎ、一般人の服装になった。

馬車を雇い、部隊の糧秣を積み込んで、奉天春日（カスガ）小学校へ行ってビックリ。開拓団の難民が大勢いた。男はおらず、女子供ばかり、着の身着のまま、食べる物もろくにない。鉄カブトで粟雑炊をたいている。見るに見かね、馬車で持ってきた食糧をみんな分けた。街へ出てみると、東北満からであろう、ソ連軍に追われ、身ぐるみはがれ、全裸に等しい姿、髪は乱れ、腰にムシ口を巻いて逃げてくる婦女子の悲惨な姿、いまだに脳裡に焼きついて離れない。

私たちは、ソ連軍の目を何とかのがれながら、苦労の末、十月末ころ奉天のテッサイという所にあつた満州発酵株式会社で働くことになった。一日も早く内地へ帰る日が来ることを念じながら年を越したが、二十一年正月の三日、朝九時ごろ、会社へ突然ソ連将校三人とマンドリン小銃を持った警備兵七、八人が来て、全員に集合を命じた。私たちはハッと思った。軍人であることがバレたと思つたからである。

しかたなしに、全員空倉庫に集合する。一人一人名前を呼ばれる。そして私たち兵七人、義勇隊の若者二十八

人は、ダバイダバイと警備兵に追いたたられ、幌のついたトラックに乗せられた。着いた所は何と奉天第二監獄、生まれて初めての留置場、不安と恐怖やくやしき。私たち七人は一部屋に、義勇隊の若者は別の部屋へ、他の部屋にも同胞が入っているようだった。もう夕方である。朝から何も食べていない。不安と恐怖、空腹で一夜を明かす。

朝食がきた。何とパラパラの粟飯に若芽汁。腹はギューギュー何でも食べねば体がもたない。朝食後四、五十分たつたころ、取り調べが始まった。私は三人目に呼び出された。取調室へ入ると、取調官に将校ともう一人、軍服を着ていない大男、白糸露人の通訳の三人。

部屋へ入るなり通訳が、お前は日本軍将校だらう、階級は何だという。私は将校なんかじゃない、二等兵だと言うと、うそを言うな、とききなり左ほおにパンチ。フラフラとよろめく。そして何もかもわかつているんだぞ、階級を言へ。私は今年三月に入隊したばかりの新兵だと言うと、こんどは二人がかりでパンチ。正直に言え、言わんか、とまるでボクシングの練習でもやるよう

に殴られ、頭はフラフラ。そのうち取調官が何か言う。通訳が正直に言え、お前は国民党軍の将校ということにはわかってるんだぞという。私は国民党など知らない。初年兵で何も知らない。それからどのくらい殴られたか……。

意識を失い、気がついたら、冷蔵庫のような部屋に一人。四、五十分過ぎただろうか、看守の足音がして、ダバイダバイの声。再び取調室へ入ると、通訳が、どうだ、頭は冷えたか、正直に言う気になったか、という。私はうそは何もいっていない、初年兵で何も知らないという、まだ正直に言わんか。痛い目にあいたいかと聞いて、かまどでたく薪で背中をバンバンやられた。苦痛でうずくまっていると、取調官が何か言っている。すると通訳が私のえり首をつかんで立たせ、鉄を持って来て、お前は強情な奴だ、正直に言わないと耳を切るぞ、鼻を切るぞといって、またバシッとくる。何も知らないから言へないという、ほかの者はみな正直に言って帰ったのに、お前は帰りたくないのか、しぶとい奴だといつて、今度は鞭のようなもので背中、腰、太ももを二

人交代でビシビシたたかれた。目にしみる痛み。

×××××××

……約二十分くらい。そのうち疲れたのか、書類にサインしろという。そして、他の者はこのとおりサインしたという。お前もサインしろという。見るとみなサインしている。しかたなしに私もサインして、同僚のいる部屋に入れられた。

みな割合元気のような。他に十四、五人同じ部屋にいる。古兵の一人は、お前があまりおそいので心配していた無事でよかった。ひどい目にあつたなあといってくれたが、私はただうなづくだけ。体は腫れあがって、さわると痛い。横になれない。義勇隊の若者のことが気にかかったが、獄舎の中だから何もわからない。どうしようもないくやしき。

不安のまま日は過ぎ、一月十二日午後、ダバイダバイの声で獄舎を出る。他の部屋の者も一緒だ。着の身着のままである。外へ出ると寒さが身にしみる。トラックに乗せられ、どこだかわからないが、駅ではない。やがてトラックを降りると、貨車がずらり二十両近い。貨車に

乗って驚いたことに、何と片側に有刺鉄線を二重に張つてある。貨車の隅には十センチか二十センチくらいの穴があけてある。その下に十二センチ角の木が縦にとおしてある。用足しの穴らしい。四十人くらいがその中に詰め込まれた。穴から風が入って寒い。だれかが持ち物でふさいでくれた。もう日暮れである。腹がグウグウ鳴る。貨車は動き出す。有刺鉄線の前では警備兵が自動小銃をさげ、ストープをたいて番をしている。何とか寒さはしのげたが、空腹と不安と恐怖で一夜が明ける。

列車がとまった。満州領には違いないが、どこだかわからない。将校が様子を見に来た。それから少しして黒パンがきた。一人一個。れんが大の大きさ。そして片手を広げてみせる。五食分と思つて、パンを割つてかじる。水がほしい。要求したがくれない。しばらくして牛の頭を姿のままゆでたのを持ってきて、食えという。全く人間扱いではない。だが、何でも食べなければ体もたない。かといって、ほじくるものはない。警備兵に牛の頭を割ってもらい、何とか骨をはずし、身をほじくり、みなで分け合つて食べた。中には、目玉のところの

みは卵の白身のようなものだといふものもいた。黒パンは二日か二日半くらいでなくなつた。それから三日から五日、何もくれない。一日一度の水はくれた。

そして列車は北へ、満州里を過ぎ、一月二十三日、チタへ着いた。ここでの食べ物もひどい。ストープがバケツで出た。具はロクに入っていない。油が少し浮いている。塩気がある。水よりはまりましたが、食器もない。小さな杓子がついている。その杓子で回し飲み。そして馬糞のような黒パン一切れ、三百五十グラムが一日分である。それに時々、鱈の塩漬けをくれた。姿のまま、猫のように頭からまるごと、骨ごと食べたことだった。約五十日して三月三日、チタを出発、西へ向かい、バikal湖畔を貨車は走る。貨車に乗つて以来三日間、食べるものは何もない。これにはまいった。乗り合わせた人は警察官、憲兵、通訳、満鉄職員など雑多だった。みなで励まし合つた。

チタを出て二十日目の三月二十三日、モスクワ東南約四百キロのモログ州第五十八収容所へ入る。ここで伐採作業を約半年。

二十一年九月二十五日にはロクスト州タカノロースに。

二十二年七月には再び極東へ帰って、ハバロフスクを転々。

そして九月二十一日には監獄に入れられ、獄中生活八か月。

二十四年五月にはホルトワニン収容所に移されて約一か月送った後、同年六月、奴隷船ながらの貨物船へ乗せられて、オホーツク海沿岸のマガダンへ。

八月十四日には、さいはての受刑地ホリマへ移される。北緯六十五度、北極圏のほりである。収容所わきには軍用犬二十頭余りがほえている。恐ろしい所へ連れてこられてものだ。生きて内地へ帰ることはできないのか。これまでの作業は鉱石採集。この辺は永久凍土のツンドラ地帯である。だから鉱石もなかなか採集できず、私たちの班は成績が悪いと、十日間は絶食で、お茶だけしかくれない。冬は夜明けが十時、日暮れが午後三時、気温は零下五十〜六十度、夜は南京虫に悩まされながらの一年半。凍傷にもならず、何とか生きのびた。

二十六年一月末、再びハバロフスク地区へ、そして二十八年七月にはナホトカに移り、二十八年十二月一日、やっと舞鶴に上陸、足かけ十年ぶりに内地の土を踏むことができた。

これひとえに、当時引き揚げ運動に携わってくださった方々、そして皆様方のおかげである。引き揚げ以来ハバロフスクの監獄でのこと、これまでのこと、抑留時の夢もたびたび、女房子供を残して連行される夢、ソ連の獄舎につながれた夢に長い間悩まされた。

あの極寒のシベリアの地で涙をのんで倒れた戦友を思うとき、胸が痛む。そして飢と寒さ、重労働を耐え忍び、引き揚げてきた人たちの苦しみや苦勞を、皆様にご理解していただければ幸いである。

ソ連抑留記

福島県 宗 像 次 男

入ソ時苦勞について